

筑波路のお遍路さん

—新四国「東福寺桜川八十八カ所霊場」巡拝—

古谷野洋子

四国八十八カ所とは四国八十八カ所にある弘法大師ゆかりの霊場の総称であり、八十八カ所を巡る巡礼者は遍路あるいはお遍路さんと呼ばれる。新四国霊場とは、地域の八十八カ所の寺院（あるいは堂宇）を四国の各霊場にみだてて、これらの寺院を巡る仏教民俗である。

かつて筑波では春の訪れとともに、弘法大師の堂宇を巡拝する遍路がやってきた。この行事は民間ではくお遍路>あるいはくお大師様>と呼ばれた。くお遍路>は田植えて忙しくなる前の農作業の合間の人々の娯楽であり、巡拝する人と迎える人との交流の機会であった。先達である導師（僧侶）の法話に耳を傾け、お経や真言、御詠歌を唱える巡拝の道中は仏教の教えの学びの場にもなった。

しかし、このような仏教民俗も高度経済成長下の農村の変容と共にほとんどが消えていった。たとえば、現在行われているとしても簡素化あるいは簡略化を余儀なくされ、バスや自家用車で一日で巡拝してしまうものが多い。しかし、茨城県つくば市松塚の東福寺の「新四国 東福寺桜川八十八ヶ所霊場巡拝」は、現在でも3月30日から4月8日（花まつり）の結願の日まで10日間、東福寺住職と共に朝の8時30分から夕方まで東福寺桜川八十八カ所霊場を巡る。

東福寺桜川八十八カ所霊場は、天保5年（1834年）3月21日に東福寺第二九世明光僧正によって開創された。明光僧正は四国八十八ヶ所霊場の砂を持ち帰り、筑波山から霞ヶ浦にそそぐ桜川流域の八十八ヶ所の寺院を四国八十八ヶ所霊場の写しとし、その砂を分けたという。

発表者は東福寺桜川霊場巡拝に長年参加してきた。そこでいつも感じることは、この行事が、人と人、人と寺、人と地域をつなぐ役割を果たしてきたことである（現在ではその役割はかなり緩やかなものになっているのだが）¹。そして、自明のことではあるが、遍路の作法や御詠歌やその場その場で行われる儀礼はまさしく仏教民俗であるということである。本作品はこれらの事項を記録するために、東福寺桜川霊場巡拝の一日を中心に製作したものである。

なお、遍路の作法についてはビデオでは順を追って紹介できなかつたので、参考までにここに記す。

1. 堂宇のお大師様には各自持参したオサゴ（白米）を少々供え、導師に従って仏説魔訶般若波羅蜜多心經、光明真言、宗祖法号（南無大師遍照金剛を3遍）、廻向文（願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆共成仏道）を唱える。その後、その寺（堂あるいは堂宇）の写しの御詠歌を詠う²。
2. お茶のご接待を受けた後はオサゴ（白米）を弘法大師像の絵の上に供え、「お茶の御恩」の御詠歌を詠う。そこが新築の場合は「新築の祝い」の御詠歌も歌う。

2018年製作、上映時間23分

¹本来、お遍路の参加者は東福寺の檀家が大部分であったと考えられるが、現在ではつくば市をはじめ、土浦市、つくばみらい市、守谷市などに住む“新住民”の参加者が多くなってきた。

²写しの御詠歌とは、例えば東福寺の場合は阿州霊山寺写の御詠歌「りょうぜんのしゃかのみまえにめぐりきてよろずのつみもきえうせにけり」である。